

明治・大正期における在北京日本公使館の建築

眞水英夫設計四代目建築群を中心として

建設工学専攻
建築史研究

me13023 川原 聡史
指導教員 伊藤 洋子

00. 序章

00-01. はじめに

在北京日本公使館（以後、北京公使館とする）は、日本初の対外平等条約である日清修好条規（1873 締結）での両国の取り決めに従って設立された。旧在ソウル日本公使館と並び、日本最初期の在外公館である。特に、宮廷建築家片山東熊の設計による三代目北京公使館（1886 竣工）は初の日本人建築家の設計による在外公館として、旧帝國図書館を手掛けた元文部省技師眞水英夫の設計による四代目北京公使館建築群（1909 竣工）は戦前最大級の在外公館建築として極めて重要と言える。

00-02. 研究目的

既往研究においては、藤森照信氏による実測調査や田中重光氏「大日本帝國領事館の建築」が本建築を扱っているが、扱う範囲の広さゆえに設立や建築の概要を追うにとどまっており、その詳細は明らかにされていない。特に四代目北京公使館の建築について、その設計者である眞水英夫については研究が充分でないといえる。本研究においては外交史料館及び国立公文書館などから公文書の収集を行い、それらの解説と分析を通じて明治・大正期の北京公使館建築群の意匠や事業に関する出来事とその背景、設計者としての眞水英夫の人物像を明らかにすることを目的とする。

00-03. 研究方法

本研究は大きく以下の手順に従って行う。

- ① 外交史料館・国立公文書館・東洋文庫などから、関連公文書記録・写真・設計図・地図等を収集する
- ② ①を解析し、北京公使館の意匠や建設経緯等を明らかにする
- ③ 片山東熊、眞水英夫ら関連人物についての情報を収集する
- ④ 本建築群の社会的、建築的位置づけを明らかにする

00-04. 調査及び収集資料

外交史料館及び国立公文書館から多数の公文書および付属図面資料を収集した。各公使館建築に関する資料を分類し書簡数を tab.1 左に示す。また北京市文物保護研究所所蔵の写真資料を、公開されている北京市東城図書館の運営する web ページ「東華流韻」より収集した。こちらも以下に収集資料数を tab.1 右に示す。

tab.1 収集資料分類表

名称	書簡数	名称	枚数
初代北京公使館関係資料	2点	三代目北京公使館関係写真	24点
二代目北京公使館関係資料	5点	四代目北京公使館関係写真	52点
三代目北京公使館関係資料	51点		
四代目北京公使館関係資料	175点		

01. 北京公使館の誕生

01-01. 成立 - 二代目北京公使館の購入

1871(明治 4) 年日清修好条規が調印された。公文書「清國との修好条規通商程締結に関する件」によれば、1873(明治 6) 年の批准書交換の際、公使館敷地・建物の策定が決められている。1874(明治 7) 年 8 月に北京市内の既存家を賃借して初代北京公使館とした。

しかし、1878(明治 11) 年には北京市内・東四牌楼六条胡同に移転している。「清國北京公使館買収伺」によれば、開設直後の 1875 年から新公使館の購入が検討されており、台湾出兵による日本への不信感の影響としている。

01-02. 三代目北京公使館の建築

1883(明治 16) 年 5 月の公文書「北京公使館買入費の件」によれば当時北京における公使館の大半は東交民巷にあり、外国公使との交際等に不便であるとして移転を検討。1884(明治 17) 年 7 月東交民巷の一角に土地を購入するめどが立った。前述「大日本帝國領事館の建築」によれば、同年に後の宮廷建築家・片山東熊を設計者として北京に派遣している。建築雑誌第 1 号「清國北京日本公使館之図」、国立公文書館所蔵「在北京東交民巷日本公使館の図」からは中国伝統家屋である四合院を増改築している。ファサードには片山が卒業論文でも取り上げた南面のバルコニーが設けられた。設計に際してはイギリスのカントリーハウスを参考にしたとみられる。写真資料から、ペディメントにはアカンサス、柱には中国で吉祥を願う鹿や牡丹などの動植物、中央入口には日本公館であることを示す菊が



fig.1 建築雑誌第 1 号より
「清國北京日本公使館本館之圖」

三代目北京公使館は 1886(明治 19) 年竣工し、同年開館を迎えた。

01-03. 片山東熊とその時代

01. 稀代の宮廷建築家片山東熊

片山東熊は 1854(嘉永 6) 年、長州藩士の家系の四男として生まれる。奇兵隊に参加して幕末を過ごし、明治維新を迎えた。山県有朋との縁から 1873(明治 6) 年工部寮に入寮し、工部大学校造家学科を 1879(明治 12) 年第一期生として辰野金吾らと共に卒業した。妻木頼黄らとともに、俗に日本人建築家の第一世代と言われる。北京公使館の設計の後、宮内省に所属し明治宮殿装飾事業、皇室博物館、東宮御所のほか多数の皇室建築を手がけた。フランス系バロックの研究・導入に努め、稀代の宮廷建築家となった。

02. 北京公使館設計の頃

三代目北京公使館の建築は片山にとって最初期の作品である。当時はコンドルが帝国大学教授を解任されるなど、政府によりお雇い外国人からの脱却が図られた時期であった。また外務省における長州閥は当時大きな権力を持っており、これらの事情から片山が選定されたと思われる。

02. 四代目北京公使館

02-01. 四代目北京公使館事業の概要

1900(明治 33) 年の義和団事件では北京公使館は大きな打撃を受けたが、この講和に当たる北京議定書では公使館区域が大幅に拡大されることとなった。これを受けて陸軍歩兵隊兵営と新公使館本館及び付属官舎が設置されることとなった。既往研究ではこの建設経緯の概要が判明している。前述「大日本帝國領事館の建築」によれば 1902(明治 35) 年、元文部省技師眞水英夫を設計・監理担当として起用した。その後竣工まで一貫して設計



fig.2 北京大観より「日本公使館本館」

にあたった。

本館建築は煉瓦造 2 階建てジャコビアン様式を基調とした折衷様式とされ、列強の豪華な公使館建築が立ち並ぶ中にもあっても、決して見劣りしない面目躍如の建築であった。

02-02. 眞水英夫とその時代

01. 不遇の建築家眞水英夫

宮本雅明著「京都帝国大学建築八十年のあゆみ」及び村松貞次郎著「草創の人々」によれば、眞水英夫は 1867(慶応 2) 年東京生まれの建築家である。1892(明治 25) 年、伊東忠太らと同期で東京帝国大学造家学科を卒業し、三菱合資会社技師となるが、1896(明治 29) 年に退社し文部省へ入省。京都帝国大学創立工事に携わる。その半ば、帝国図書館の設立のためアメリカ視察を命じられ、帰国後は設計を任された。建築雑誌第 234 号の報告、「帝国図書館建築に就て」によれば、日本文化の集積としての図書館の設計に情熱を燃やし、火燈窓や墓股などの日本的意匠を盛り込んだ設計案を提出するも、この案は辰野ら設計委員会の反対に合い修正を余儀なくされた。また、政府の反対により規模が大幅に縮小されたこともあって、1902(明治 35) 年 7 月、職を辞している。直後に外務省嘱託技師として本建築群の設計監理を担当。工期末期には清國政府の要望で北京大学の前身である京師大学堂の建築群の設計監理を担当した。前述「草創の人々」によれば竣工後は帰国して眞水工務所を設立。田中長兵衛邸などの設計を行なった。

02. 眞水の言説と活動

眞水は設計以外にも建築界に関わる様々な活躍をしている。一つには積極的な言説の発表、弁論活動を行っていた。技術的な研究によるものも多いが、建築雑誌第 134 号「帝國京都博物館」と題された評論では京都の街で日本の工芸品を飾る施設を作る以上は新様式に挑戦すべきであったと批判するなど、前述の帝国図書館案と照らしても、当時代的な日本の国家建築について大きな関心と思想があったことが伺える。また、中堅技術者の啓蒙を行なった浪和会の主幹を務めて、雑誌「建築」を創刊し、日本建築士会の設立に参加するなど、権利保護や組織運営にも積極的であった。

眞水は俗に第二世代と呼ばれた、日本建築界に思想を生み出した最初期の世代である。一般には伊東の「法隆寺の発見」を皮切りとして日本的な意匠についての論考や取り組みが多い世代といえる。眞水もそれに違わず、思想や今日の・日本の新様式に熱心であったといえる。

02-03. 各建築について

資料を元に四代目北京公使館の建築群の分析と考察を行う。外交史料館所蔵「在支那公使館新築一件 (第一巻二巻)」からの図面・仕様書を中心として収集写真資料等と照会し、分析を行っている。

tab.3 | 四代目北京公使館資料の有無及び基本情報

項目	仕様書有無	図面の有無	写真の有無	建設の形態	施工業者	施工責任者	竣工年
本館2階建て		○	○	新築	大倉土木	皆川廣量	M42
(二一号室)	○	○		新築	大倉土木	皆川廣量	
庖厨所平屋	○	○		新築	大倉土木	秦小一郎	
苦力部屋平屋		○	○	移築改築	大倉土木	澤山富吉	
事務所	○	○	○	新築	大倉土木	皆川廣量	M41.7.31
通訳官官舎							
厩舎	○			新築	大倉土木	皆川廣量	
馬車置場	○			新築	大倉土木	皆川廣量	
馬夫部屋							
表門	○		○	新築	大倉土木	皆川廣量	
中門							
馬繋所							
門番所	○		○	新築	大倉土木	皆川廣量	
供待所							
(陸軍職工宿舎)	○	○		移築改築	大倉土木	秦小一郎	

本梗概では、特に成果のあった 3 つの建築について分析と考察を掲載する。

01. 本館

本館の建築に関しては公文書付属の「清國大使館裝飾案」により、“西洋式の建築なれども” 日本国の公使館であるという自負のために“我が莊重なる桃山時代の様式を採り”、“近時欧米に行わるるアール・ヌヴォー” の参照によって “世界現時の進歩に後れざらんことを期す” 事を目標にしていたことがわかった。実際に古写真にも獅子型彫刻、楼閣風の塔を見ることが出来、更に「本第三十四号二十号室及び二十一号室詳細図」には内壁面上部に墓股と斗束をアール・ヌーボー風にアレンジしたような意匠が見られる。

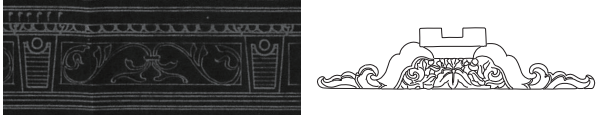


fig.3 | (左) 詳細図に見られる意匠 (右) 桃山時代の墓股の一例——由岐神社内殿

02. 事務所

本館に最も近い意匠を持つ。本館については確認できなかった仕様書も確認できたため、本館仕様を推察する上で参考になるであろう。イギリス積みの煉瓦造 2 階建てに木造バルコニー部分を付加しており、屋根構造は木造洋小屋トラスである。主要室の主な仕様は木造床、木造巾木、漆喰壁、漆喰天井で、窓扉類は木造ベンキ塗の額縁を廻す。

03. 門衛所

門と一体型の門衛所である。アーチ装飾を切妻すれすれに配し、中心性と強い引き込み作用を生む手法は、京都帝国大学の建築や京師大学堂の建築でも同様に正面のファサードを強めるように配置しており、この手法は眞水がよく建築群の顔として使用する意匠であるといえるだろう。

02-04. 出来事・物品・材料

前述「在支那公使館新築一件 (第一巻二巻)」によれば、既往研究で明らかであったこと以外にも、大倉土木組事務所の火災や陸軍省都の土地に関する照会の不備など、様々な遅延事情があったことがわかる。また暖房設備や西洋窯などの輸入や日本の原安商会への電燈類の発注が確認され、さらに仕様書から本建築群の材料として大量の古材を利用していることも判明した。設備面を充実させつつも少ない予算をやりくりするための工夫であろう。

04. | 終章

帝国図書館の設計に際し眞水が試みた、日本的なるものの象徴としての寺社意匠の取り込みという手法は、第一世代の建築家であった辰野らに否定され、失意のまま北京へ渡った。しかし北京公使館の設計で再び日本的なる意匠の導入を求めたのである。四代目北京公使館の建築群を見る限り、第二世代の建築家たちが思想に目覚め、日本を「発見」し、様々な挑戦を試みたその渦中に、眞水英夫という建築家がいたことは間違いないだろう。

また、眞水が北京公使館の建築群において、日本的なるものと様式建築の融合を図っている頃、片山も最大の傑作である東宮御所の設計においてアール・ヌーボーと日本的要素の導入を試みた。しかし、寺社意匠をアール・ヌーボーと解いた眞水は、導入から更に進んで新様式を展望したのであろう。その設計手法の差異には二人の世代の差がよく表れているといえるのではないだろうか。

参考文献

田中重光著 相模書房 「大日本帝国の領事館建築」 2007.10
北京市東城図書館 「東華流韵」 <http://www.bjdclib.com/subdb/laneculture/>
藤森照信著 岩波新書 「日本の近代建築 (上・下)」 1993.11
五味文彦他編 山川書房 「詳説日本史研究」 1998.9